

源流人会だより

ぼたいたい!

源流のひとしづく

第7号

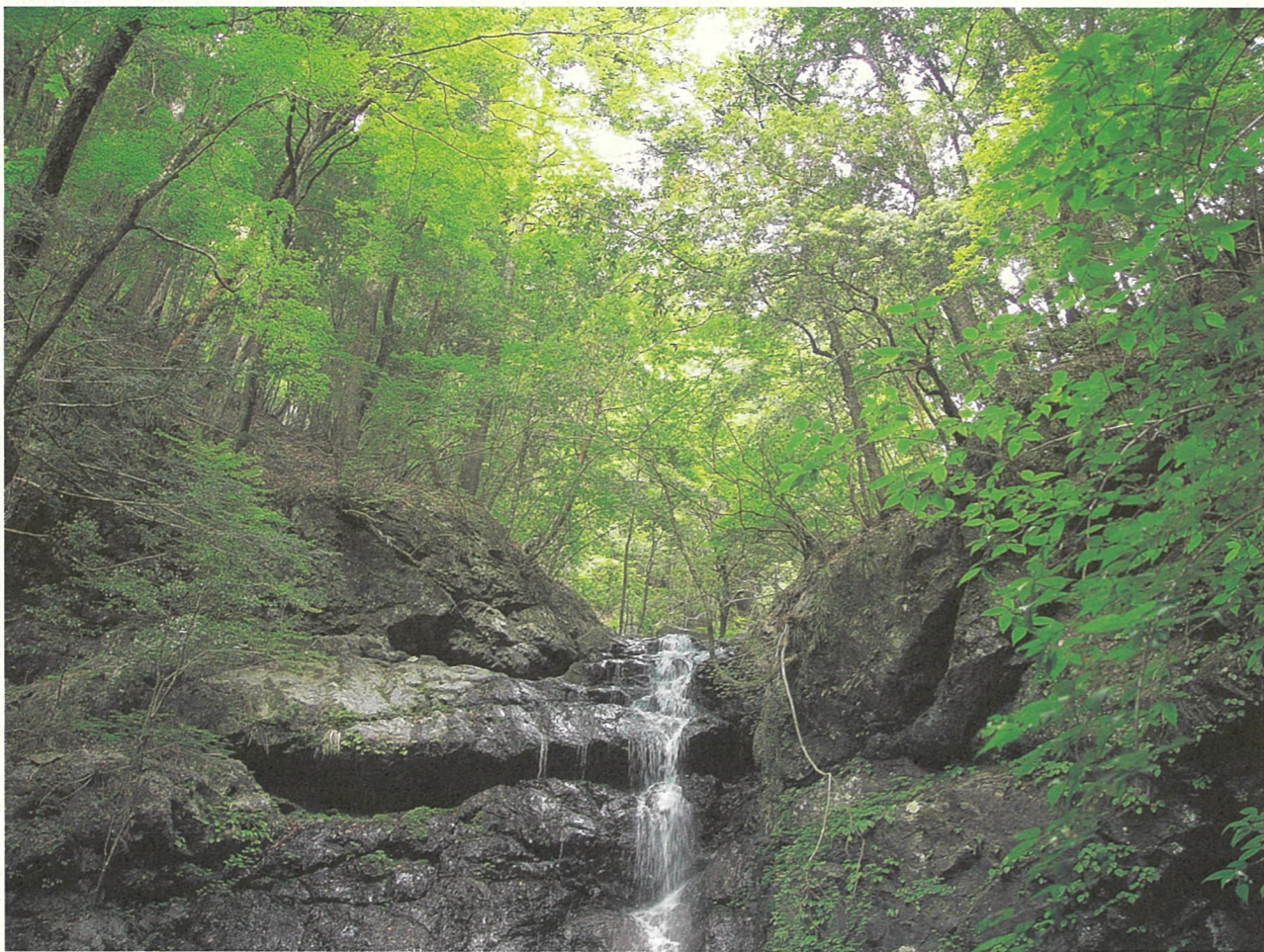
2005 夏号

森と水の源流館

住所 ● 奈良県吉野郡川上村宮の平
財団法人吉野川紀の川源流物語
TEL ● 07465・2・0888
FAX ● 07465・2・0388
URL ● <http://www.genryuu.or.jp>
E-mail ● morimizu@genryuu.or.jp

CONTENTS

- ・コラム
- ・第3回 源流学講座
- ・調査報告 ～昆虫～
- ・川上村見聞録④
- ・川上村の主役たち・源流人会活動報告
- ・交流のページ



「水源地の森」の谷の奥、普段は人の入らないところにある滝。地元の方に聞いても名前はわかりません。いつのころからか途絶えることなく流れ落ちる水。何日かけて海へたどりつくのかしら・・・



ぼたいたい

源流のひとしづく

夏
第7号

ぼたいたい 源流のひとしづく 第7号 発行日 平成17年7月発行
発行所 財団法人吉野川紀の川源流物語 森と水の源流館

TEL 07465・2・0888

本の紹介



川上村で生まれ育ち、豊かな自然の陽光をいっぱい浴びつつ、いつもほがらかで少女のようにお茶目な中谷さんの『句集 源流』。「源流」の村、川上村から生み落とされた、みずみずしい句集です。

『句集 源流』中谷トクエ 著
株式会社 文學の森 発行 233ページ
Tel 03-5292-9188

交流のページ

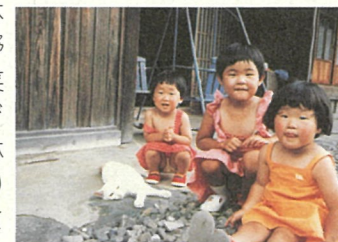
このページは源流人会会員さんや、源流・川上村とつながる個人・団体のみなさんの活動紹介や情報交換の場です。



雨降りの音に朝寝をいたしけり
炎天や在所総出の楨出荷
模様替へ部屋に色無き風通す
足跡に猪か鹿かと詮議せり
笑みかくる遺影に鳴咽雪舞へり
雪十日降り込められてをりにけり
客人の腰浮かしたる屋根雪崩
女正月銚子転がし深眠り



4月から源流会に入りました。機関紙「ぼたいたい」を楽しみにしています。書き手のメッセージが伝わってきますね。吉野で生まれ育ち、川上村東川にある祖父母の家で夏休みになれば過ごしてきた川上村で、仕事するようになって6年目です。田舎道や吉野川で遊んだこと、烏川神社の境内の夏祭りや近所のおっちゃん、おばちゃんたちの笑顔・・・川上村で過ごした時間があって私の今がある、そしてつくづく川上村は奥が深いと感じます。水源地・川上村は、先人たちが代々築きあげてきた杉の山、吉野林業という産業によって暮らしを支えてきた、そのことに畏敬の念を感じます。当たり前前に目の前に広がる環境と暮らしの大切さ、川上村も隣のまちむらも下流まですべてひとつにつながっている、ここからつながってほしいなと思っています。



▲猫の真横にいるのが3歳の私 (大淀町 青木志帆)

森と水の源流館の近くでイソヒヨドリに出会いました。どうやら巣があるようです。きれいな青色の鳥です。そのイソヒヨドリが、ムカデと格闘し勝利したようで、くわえて飛んでいきました。そんな光景を見ていると、自然が近いなあと感じます。毎日せかせかしていると、こんなに近くに自然があるのに、全然気付いていない事もあり、もう少し余裕を持たなければ・・・と反省します。少し立ち止まるだけで、イソヒヨドリに出会ったり、ウグイスの鳴き声が聞こえてきたり、蛙の鳴き声、アリの行列、道端の花、色々な物が見えたり、聞こえたり、また匂ったりします。そんな事が、普通に体験出来る。そんな素晴らしい環境で過ごしているのに、日々普通に生活していると、当たり前のようになっているんですね。そんな時は少し立ち止まり、全身で感じてみると新たな発見が出来るかもしれません。(K. K)

水源地の森守募金

募金は次のような活動にあてられます

- 吉野川・紀の川の水について学ぶ副読本を作成し、流域の小学4年生に配布
- 「源流学の森づくり」事業
- 「水源地の森」の保全を呼びかけるための啓発用看板の製作と設置

「副読本」を利用いただいている先生からの声

- ・「社会の教科書にのっている川上村だよ。」と言って子どもたちと読ませて頂きました。
- ・実際に上流にさかのぼって見たり、体験したりできればいいのですが、そうはいきません。けれど、この『水の旅のはなし』を利用して子どもたちは知る事ができるのでとてもたすかります。
- ・源流館も実際に見学させていただいています。学校でも自然体験のすばらしさを、冊子を通して伝えられればと思います。



郵便振替

00950-2-331164 「水源地の森守募金」あて

源流人募集!

源流人とはかかげがえのない水を生む源流の自然を愛し、源流を守り、育ててゆくことのできる人です。

源流人会には集い、話し、遊び、学び、考え、触れ、交流し、参加し、喜びを分かち合いながら、源流を守り、育ててゆくことのできる会です。

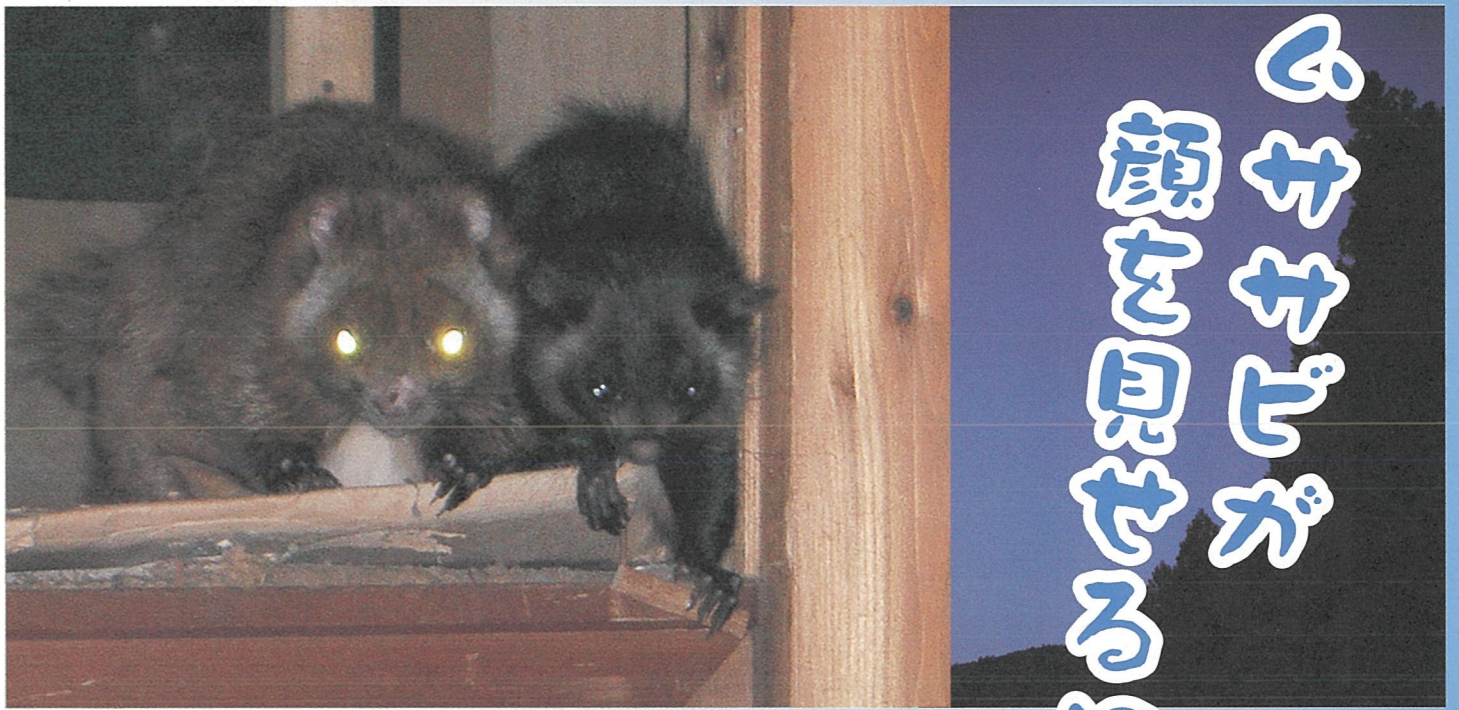
ともに源流学を楽しみ学び仲間を紹介ください

年会費	個人	2,000円
	家族	3,000円
	学生	1,500円
	団体	10,000円

郵便振替 00940-1-331163



ムササビが顔をみせる!?



いつの頃だろうか、家の屋根裏で何が動く音が聞こえたのは。大きな音を立て走り回ったり、壁際に落ち込んで必死に這い出ようとして引つかく音がしたりして、「なんやろ」と家族で話していました。

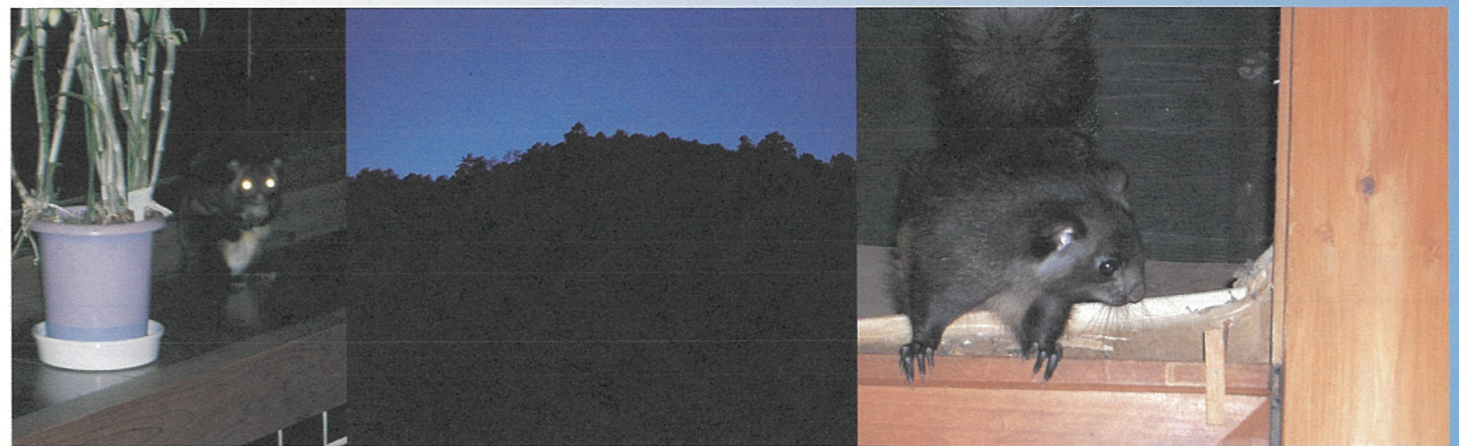
ネコ、タヌキ、アナグマ（以前、居間まで出入りするようになったことがあるので、などが候補にのぼりましたが、いずれも違うようで、天井裏なので確かめようがなく放ってありました。

下駄箱の横の隙間に何となくはまり込んでいたので、ある日、下駄箱の上の天井板を外して様子を見ようことにしました。バタッ、ドンといういつもの物音がして、「何か来た！」と気が配りました。台所の戸を開け、忍び足で近づき、板をそとと開けて見ました。

「おった！」と思うやパッと屋根裏に隠れてしまいました。一瞬だったのですが顔は見たものの、何かわからずでした。さっそく「森と水の源流館」に電話をして聞いたところ「ムササビ」ではないかということになりました。時々屋根裏にすみつくことがあるらしいのです。その後、何匹か顔や姿を見せ、どうやら3、4匹はいるように思われます。

5月のある日、その中の一匹が、玄関の土間に飛び降りてしまっていることに気付きました。夜中の2時頃でした。狭い土間をあっちへ行ったり、こっちへ行ったりと、もとの場所に帰りたいけど帰れない状態になりました。そこで、手助けをすることに。下駄箱の上から天井に上られるように階段のようなものを取り付けて様子を見ましたが、思うように行かずこちらであっちへ行ったり、こっちへ行ったり。ようやく屋根裏に帰ったのは3時過ぎでした。

その後も何度となく顔を出して、愛想を振りまいてくれていましたが、6月に入り、姿を見せなくなりました。今度はまたいつ顔を出してくれるのでしょうか。（坂口泰一）



ムササビ（鼯鼠）

大きさは体が40cm、尾の長さが30～40cmと、猫にフサフサの尾をくっつけた感じ。体重は800～1,000g。夜行性で屋は木のウロ（空洞）や天井裏、戸ぶくろなどにすんでいます。ほぼ日没と同時に活動をはじめ、四肢を広げて長い尾でバランスをとりながら、木のでっぺんから次の木へと滑空する姿は、まるで座布団のようです。ムササビの食事は木の芽や葉、花、実、昆虫類など。糞は正露丸そっくりな色と形です。春先と夏ごろに1～2頭を出産。行動範囲はおよそ1～2ha。

川上村の主役大雨

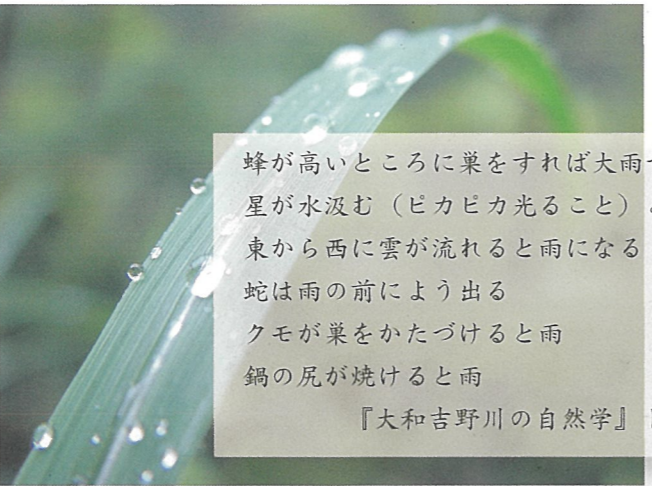
東に台高山脈、西に大峯山脈にはさまれた川上村、その南は日本で一番雨が多いという大台ヶ原。上流の大迫ダム周辺の降水量は平均して、少ない年で2000mm、多い年で4000mm弱というところでしょうか。夏から秋にかけて訪れる台風が多くの雨をもたらしてくれまます。

しかし、昨秋の台風は雨をもたらしただけでなく、一部の谷ではたくさん砂利が堆積しました。淵がなくなくなり、浅瀬が続いたり、伏流して川が細くなったりともあります。さらに、今年の春から梅雨にかけては雨が少なく、支流ではその姿を消してしまったりもかなり減っています。このまま雨が降らないと大迫ダムの水位も下がる一方です。魚や水生昆虫はどこに引越すのでしょうか？

さて、今私たちは容易にテレビで1週間分の天気を知ることが出来ますが、昔は自然からの情報を五感を通じて的確に察知し、判断していました。吉野川流域で気象に関し、最も関心の深い職種は筏師であったといえます。そんな筏師さんたちの雨に関わる言い慣わしを一部紹介します。



▲ 雨上がりの霧



蜂が高いところに巣をすれば大雨や台風がくる
星が水汲む（ピカピカ光ること）と雨が近い
東から西に雲が流れると雨になる
蛇は雨の前によく出る
クモが巣をかたづけると雨
鍋の尻が焼けると雨

『大和吉野川の自然学』トンボ出版より

私は雨の日にかかる霧が好きです。山肌をぬって空に舞いあがる霧は龍のようにも見えます。龍が雨の神様というのも納得です。ポタッポタッという雨音も、クモの巣や木の葉、枝にかかっている雪を見るのも大好き。今夏は光つて本当にきれいです。今夏の雨、どうか暴れすぎず、森を命を潤してくださいように。



源流人会活動報告

ぱたり前号でもお知らせしました、17年度の源流学の森づくりは「小屋づくり」。4月は、小屋の柱などの材となるスギ・ヒノキを近くの人工林で間伐しました。5月14日は基礎づくり、15日は間伐の続きを行いました。6月は丸太を四隅に建て柱としました。毎回ちよつとずつの工程ですが、一つの工程にたくさんのお手伝いがあり、「ほおー」「なるほど！そうするのか」などなど、感心することばかり。なんと今年内に完成させ、いろいろを囲み、小屋の夜を過ごしたい！次回の小屋づくりは9月です。

6/5 参加者の感想

「おうちあるの？」なんて子供に質問されて思わず口ごもってしまった、そんな苦い経験を二度としないためにも、せめて小屋のつくり方ぐらひは覚えておこうと思ひ、今回、源流学の森づくりで行われている小屋づくりに参加しました。

館を出発し、途中で山の神に参拝して現地へと赴き、作業を開始しました。既に基礎の部分は出来ていたようなので、柱を立てる作業から始まりました。

まず柱を立てる位置に穴を掘ります。その際に柱の中心がくる位置の地面に印をつけるために、あらかじめ糸を張って決めてあった場所から糸を落として印をつけました。なかなかうまく石が中心に落ちてくれず、何度か繰り返すことになりました。印をつけた場所に穴を掘った後、そこに柱を立て、できるかぎりまっすぐになるように調整（辻谷館長の正確な目分量）して、掘った穴に石と土をいれて柱を固定し、さらに板を打ちつけて固定しました。その後、



扉の枠を作り、まだ立てていない柱の先を、チェーンソーを使って杭状にする作業を行いました。

以上のような行程で作業をしましたが、正直、この文章を読んでもよくわからないと思います。自分のつたない文章表現能力を差し引いても、やはり百聞は一見に如かず。ぜひ皆さんにも参加してみたい。実際に体験して欲しいと思います。普段なかなかできない貴重な体験ができた一日でした。

（会員 No.55）

川上村見聞録④

*このコーナーでは、民俗担当の黄瀬桂子が村で見たこと聞いたことを「川上村見聞録」として紹介していきます。

「高原の法悦祭」

川上村でも最も古い集落の一つといわれる高原。さすがに古くからの伝統行事が多く伝わる。今回は、夏の行事「法悦祭」をレポートする。

法悦祭は、悪病祓いと豊作祈願のため、約1100年前から行われてきたという。別名「チャンゴカンゴ（鎮護加護）」。

氏神である十二社神社のお堂（もとは薬師堂だった）で「ホウエツサイ」という掛け声と共に、一定のリズムで太鼓を叩き、それにあわせて鉦を叩く。「50年ほど前はたたくさんの伝統的なきたりがあり、袴を着用して太鼓を叩いていた。叩く練習もあり、年上の人から『法悦祭は五穀豊穡を祈るんやかい、しつかりやらなアカン』と、ホウエツサイという掛け声の時の、腕をあげる高さに至るまで厳しく教えられた。高原に伝わることわざに「オンジ（地名）の横道に日差しがいったならば、チャンゴカンゴを始めよ」というのがあり、これはいわば日時計で法悦祭を始める時刻を知るといふ知恵だが、この時、集合の合図に鐘がつかれる。「半時間

の間に18回鐘がつかれるんやけど、その間に集合せんかったら除名された」と古老が語るように、厳しい取り決めがあった。

行事を取り仕切ってきたのは、「十二人衆」という高原独特の集団である。十二人衆は、惟喬親王（*1）にゆかりの木地屋筋（筋目）と呼ばれる家系の男子で構成される。「十二人衆は、集落の自治の中心をなし庄屋のような役目を果たしてきた」という。

行事は、昔は旧盆に行われていたが、近年は8月7日〜15日（*2）に行われるようになり、14日からは太鼓をお堂の梁から縄で吊る。「太鼓を吊るのは、オドリウチする時に激しく揺らしたりするから」という言葉通り、叩き手が3人以上、たいていは10人程になると「踊り打ち」といって太鼓の周囲を激しく廻りながら叩く。熱気が満ちてくると、太鼓そのものをまわす。太鼓を「回す」というよりは、「舞わす」ような迫力だ。クライマックスの15日には、正装して惟喬親王ゆかりの「御井戸」へ伊勢音頭を唄いながら水を汲みに行き、そ



▲厳重に天井から吊るされ出番を待つ太鼓



▲風に揺られて綺麗なポタントウロウ



▲道中伊勢音頭を唄いながら御井戸へ



▲室内に熱気がこもるオドリウチ



▲鉦を叩く



▲回る・舞う・太鼓



▲しめくくりの祈禱

の後この行事で一番熱気を帯びた太鼓と鉦の協奏がこだまする。

ある古老は「50年程前は集落に50人ほどの若い男子がいたので、しきたりも厳しかったけど上手く組織がまわっていたなあ。今、世の中では盛んに世代間交流が叫ばれているけど、僕が小さい時は我が家は一家4世代やった。法悦祭などの伝統行事にはウチから3世代で務めを果たした。昔は家族の中にも、集落の中にも世代間の伝統行事の継承があつたんや」と話す。

少子・高齢化、過疎化の波は高原にも例外なく迫り、十二人衆は2年前に解散した。伝統行事とは、厳しいしきたりによって、また一方で娯楽を皆で共有することによって、集落全体の世代を越えた団結力、郷土愛を育み、知恵や技、喜びの豊かな表現力を継承していく、いわば一つの装置であると私は考える。

高原だけでなく、川上村では近年貴重な伝統行事が消えつつあるが、もっと多くの人に、川上村の人々が、この地でのように暮らして、どのよう知恵や技、歴史をつむいできたか知ってもらいたいと切に願う。

どうですか、まずは今年の法悦祭、見に来ませんか。

(*1) 平安時代前期。文徳天皇の第一皇子だが政争に破れ高原に隠棲し、木地師の祖神であると地元で伝わる。

(*2) 10日、11日は各家庭で盆の用意や、セッキバライのため休み。かつて買物は半年ごと（節季）のツケ払いで、盆と正月にその支払いが行われた。

*お日程、時間などは森と水の源流館へお問い合わせください。地元の方が大切にされている行事ですので、節度ある行動をお願いします。

源流学講座

第三回

基地&山小屋造り編

わしが山の仕事に入った半世紀前頃は、まだまだ山小屋で寝宿（ねとまり）をして仕事をしておった。当時、山小屋で寝泊まりすることを、ジョウゲに行くといつた。昭和40年（1965年）頃以降はジョウゲのことを山泊と呼ぶようになった。わしの最後の山小屋泊まりは、昭和56年（1981年）頃に終わった。

山小屋の建物も大工建といつて製材した角材で大工が普通の住宅のように建てた小屋や、杭建小屋（掘って立てた小屋）といつて丸木で建て、杉皮の屋根で天井のない、畳の代わりに藁を敷いた簡単なつくった小屋であったが、昭和40年頃より木材に代わって、軽量鉄骨のハウスが大和ハウスメーカーでつくられ、山に建てられた。大和式のハウスは建物の真中に通路があつて、通路をはさんで両側に向かい合つて15人は寝られるスペースがあり、6m×10mのハウスでかなり広々としていた。そんなハウスが40年たった今も山に行くとき残っている。もう使用はできないが目にとまり、当りがなつかしく思い出される。

当時、なぜ山泊だったのか？それは林道も現在ほど発達していなかったし、もちろんモノレールといった便利な乗り物もなかった。当然家を出ると帰るまで足で歩くより仕方なかった時代に、遠い山での仕事は仕事をす時間より歩く時間の方が長かったたので、現場に山小屋を建て、泊まって仕事をすることで歩く時間の無駄をなくし、仕事の能率の向上を図ることになった。



▲「大工建ての山小屋にて



▲「山小屋の生活風景。藁とランプと28歳の館長



川上生まれ川上育ちの達っちゃん（辻谷達雄館長）は、50年以上の山仕事のベテラン。その長い人生の経験から、自然とともに生きる力や知恵などを笑いのエッセンスを加えてお届けします。

いくら山小屋住まいといつても、生活するための最小限必要な生活用品は山小屋に運び込まなアカン。昔は山道を2時間も3時間も荷物がかついで歩くのは常であつた。最初の日は布団、食器、仕事の道具を上げる。2日目は食料を1週間分ほど持つて登つたそうだが、わしが山泊する頃は架線が張つてあつたので、架線を利用して荷物を上げたので、先人達よりは楽やつた。

わしらが山宿する頃は食料事情もよくなつていたが、先輩の話によると、魚は塩辛いサケやサバしかなく、かつそうな。昔、木さんというおっさんがおつて、ジョウゲで塩サケの頭だけをおかすにして一週間メシを喰つたという。そして一週間メシになると、サケの頭の塩気がなくなるが、捨てずにさらに頭を酢に一晩つけ、骨をやわらかくしてそれを喰つた、という話は有名である。他には乾物類と野菜しかなく、近頃の川で川魚（アマゴ）を釣つて喰つたりしたそう。この話はわしの親父の時代のことである。

わしの山泊まりの時分も電気はなく、ランプの生活だったので、冷蔵庫なんぞ切なかつた。カレーライスがよくつくつて喰つたが、すべて缶詰のカレーであつた。他に喰うものがなかつたので非常にうまかつた。カレー皿で7杯喰つただけでなく、若い連中はみんなそうであつた。山宿に入って最初の一週間は一日一人頭、米一升一合（三食で）喰つたが、しばらくすると、腹がきまつてきて一日九合ぐらいにおちつくものである。

炊事はグループの中で毎日交替で行つた。朝は早いので、小屋の中は暗いうちにメシを炊き上げ、炊き上がる頃に

はうす暗く見えるようになる。わしが担当した朝食の時、メシができたので、うまかつた炊きた鍋のフタをとると、鍋のすみこで黒いものが見えた。ランプを近づけると、ネズミが一匹メシの中であつた。米といつしよに炊いたら、まだみんな布団の中であつたので、そうつとしゃもじでその部分だけすくつて、山の中に埋めておき、みんなを起して朝メシを喰つて、それぞれ弁当を詰めて終わつてから「今朝のメシは特別味がよかつたのと違うか？」と聞くと、全員「なんでや？」。実はネズミ一匹鍋に入つてたらしくいつしよに炊いてしまったんや。みんなは「ヤレキョータヨ」といっただけで、別段誰しも気にせず、弁当をさげて仕事に行つたことは今でもはつきり覚えている。

風呂はドラム缶風呂で、屋根もない外でポツンとドラム缶をすえつけてあつた。足の裏が熱いので、下駄をはいて入つた。初めて入つた時の失敗は、足の膝頭と尻がつっぱつて立てなくなつたこと。雨降りには傘をさして入つたが、よく晴れた夜は星や月を眺めながらなかなか風流な入浴ができた。

食べもので印象に残っているのは、ぜんざいを炊いて朝から一日谷川に鍋ごとつけて冷やしておいて、夕方仕事から帰つて喰つたこと。ぜんざいの味は今でも忘れられない。汁椀で10杯くらいは覚えていたが後の喰つた数は覚えていない。

山小屋での思い出は限りがないので今回はこれくらいにしてまた次回のお楽しみとする。

「源流学」の森に今年度完成をめざして造り始めた掘つて立て小屋も、源流人会のみんなが楽しめる山小屋に出来るように、がんばると！

<p>シリーズ vol.6</p> <p>『吉野川源流—水源地の森』 生態調査報告</p>	<p>昆虫類</p>	<p>この調査は、吉野川・紀の川の源流部に位置し、川上村が購入し、保全している原生林「水源地の森」の保全を進めるための基礎調査として、この森と水の源流館に生育・生息する動植物の現状を把握するための基礎データを得るものです。</p>	<p>期間：2003.11～2004.3 調査地域：水源地の森 (全740haのうち382ha) 調査項目：植物・巨樹・哺乳類 鳥類・両生類 は虫類・魚類 底生生物・陸上昆虫類</p>
---	------------	---	--

木村史明 (橿原市昆虫館 学芸員)

水源地の森には実に多くの昆虫たちが棲んでいます。これまでの調査で、コウチュウ目やチョウ目を中心に13目136科1,200種を超える昆虫を確認しています。しかし、現在も調査に入るたびに新たな種が記録されるような状況なので、今後調査が進めばこの数はさらに大幅に増えることでしょう。

今回は、現在確認されている昆虫のうちのごく一部をこの森の良好な背景と結びつけて紹介したいと思います。



【緑豊かな森と昆虫たち】

植物の葉を食べて育つ虫といえば、真っ先に思い浮かぶのがケムシ、イモムシなどのチョウやガの幼虫ではないでしょうか。これらの昆虫たちはそれぞれの種類によって基本的に好みの植物が異なります。

豊かな原生林を含み、標高450～1,000m超と高低差のある水源地の森では、たいへん多くの種類の植物が見られます。植物の種類が多ければそれらを食べ物とする昆虫の種類も多くなります。

これまでに、550種を超えるチョウやガの仲間を確認していますが、中にはモンキシロシャチホコやナカスジシャチホコなど分布の中心が北日本にあるものや、タツタカモクメシャチホコのように東海から四国、九州と黒潮に沿って分布するもの、さらには、これまで奈良県では記録のなかったベニイカリモンガやサツマジミなどの南方の暖地を中心に分布する種類なども見つかっています。

また、水源地の森自体ではまだ確認されていませんが、隣接する三之公川流域や北股川流域には本州で唯一確認されているゴイシツバメシジミの生息地があります。

【枯れ木が育む昆虫たち】

森の中を歩くと必ず、立ち枯れや倒木などの枯れ木を目にするとします。安定しているように見える原生林の中でも絶えず木々の更新が行われているのです。これら木の死骸ともいえる枯れ木を分解して土に戻すのに大きな役割を果たしているのが、クワガタムシ科や、カミキリムシ科などのコウチュウの仲間を中心とした多くの昆虫たちです。

また、キノコなどの菌類も枯れ木の分解に重要な役割を果たしているのですが、これらのキノコを食べる昆虫の種類も水源地の森では少なくありません。タカラチビオオキノコやトモンチビオオキノコ、キムラチビツノゴミムシダマシなど県内初記録、または数例目の記録となるような種もいくつか見つかっています。

【動物が育む昆虫たち】

水源地の森はシカやイノシシをはじめタヌキ、キツネなど哺乳動物の宝庫でもあります。そのため、これらの動物と関わって生活する昆虫も数多く見られます。

ルリセンチコガネ (オオセンチコガネ) は青い翅を輝かせて木々の間を飛ぶ姿をよく見かけますし、夜の灯りには小さいながらも立派な角を持ったゴホンダイコクコガネが飛んでくることがあります。これらはフンチュウと呼ばれる動物の糞を食べる昆虫たちで、ウンコの掃除屋の役割をはたしています。

また、動物たちも死にますが、その死体の掃除も昆虫たちが引き受けます。各種のハエの仲間のほか、シデムシ科やハネカクシ科などのコウチュウの仲間が活躍し分解します。獣毛などの乾いた部分にはアイヌコブスジコガネなどのコブスジコガネの仲間も見られます。

その他にも、マグソクワガタなど川原の環境で見られる昆虫や、クロシジミなどの人工的に作られた草地環境に進出した昆虫など興味深い種が数多く確認されています。

昆虫は小さく、隠れるのが上手いものが多いため、特に薄暗い森の中ではなかなか見つけにくいのですが、意外と目の前の枯れ木にとまっていたりするので。観察会などでは目を凝らして探してみてください。



キムラチビツノゴミムシダマシ *Byrsax kimurai*
(コウチュウ目 ゴミムシダマシ科)
体長4mm弱と小型ながら、頭にカブトムシもびっくりの長い角を2本も持っている。
水源地の森では本種とよく似た別種、コチビツノゴミムシダマシも生息している。



トモンチビオオキノコ *Tritoma asahinai*
(コウチュウ目 オオキノコムシ科)
テントウムシの仲間のようにオレンジ色の地に黒色の斑紋を持つ。水源地の森では多くの種類のキノコが見られるが、本種はハチノスタケで見つかった。体長は約3.5mm。



コルリクワガタ *Platycerus acuticollis*
(コウチュウ目 クワガタムシ科)
青緑色に輝く美しいクワガタムシ。幼虫はブナなどの枯れ木を食べて育つ。水源地の森を含む台高山脈には他にルリクワガタとニセコルリクワガタという近縁の別種があり、標高や生息環境により棲み分けている。



ルリボシカミキリ *Rosalia batesi*
(コウチュウ目 カミキリムシ科)
明るい空色に黒色の紋を持つおしゃれなカミキリムシ。ブナなどの広葉樹の枯れ木に飛来し、産卵。幼虫は枯れ木内を食べて育つ。



マグソクワガタ *Nicagus japonicus*
(コウチュウ目 コブスジコガネ科)
上がオスで、下の黒いのがメス。5月ころ枯れ木が埋まった川原の砂地で見られ、夕刻オスはメスを探して地上低く飛び回る。



クロシジミ *Niphanda fusca*
(チョウ目 シジミチョウ科)
夏季に林道脇のススキの周辺で見られる。母チョウは根元にクロオオアリの巣があるススキに産卵。幼虫は3齢以降クロオオアリに運ばれ、巣の中で養われる。

橿原市昆虫館ではこの夏の源流の森の昆虫をテーマにした特別展「生命の森の昆虫たち」を開催します(8月5日～10月10日)。この調査で確認できた昆虫たちを詳しく紹介しますので、ぜひお越しください。